様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2021
課題番号：２０Ｋ２２２９０

研究課題名（和文）日米間におけるダークパーソナリティ特性の文化的等価性の検討

研究課題名（英文）The Cultural Equivalence of Dark Personality Traits between the United States and Japan

研究代表者
下司　忠大（Tadahiro, Shiomotsukasa）

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：６０８７５２１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的はダークパーソナリティ特性（マキャベリアニズム，自己愛傾向，サイコパシー傾向，サディズム）の文化的等価性を検討することであった。具体的には，Dark Tetradを測定する上で海外で代表的に用いられているShort Dark Triad (SD4)の日本語版を作成し，その信頼性と妥当性を検討するとともに，原版の尺度と同等の構成概念を測定しているかどうか（測定不変性）を検討した。その結果，原版の尺度と同等の信頼性および妥当性を確認することができ，原版の尺度との測定不変性も確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ダークパーソナリティ特性は，非生産的職務行動，セクシャル・ハラスメント，いじめ・攻撃行動などの多様な問題行動に関わる特性であり，このような問題行動の予防・介入時に考慮に入れられるべき重要な特性であると考えられる。 しかし，これらの知見はほとんどが欧米圏の研究であり，東アジア圏の研究知見は乏しい。欧米圏と東アジア圏との間では自己観が異なることや，東アジア圏の方がダークパーソナリティ特性の得点が低いことから，この特性の文化的等価性が問題として残されている。本研究によってその文化的等価性を示したことは，我が国の問題行動への予防・介入に向けて海外の研究知見の応用可能性を示唆するものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the cultural equivalence of dark personality traits (Machiavellianism, narcissism, psychopathy, and sadism). Specifically, we created a Japanese version of the Short Dark Triad (SD4), which is typically used overseas to measure Dark Tetrad, and examined its reliability and validity, as well as whether it measured constructs equivalent to those of the original version (measurement invariance). As a result, we could confirm reliability and validity, equivalent to those of the original version of the scale, as well as measurement invariance with the original version of the scale.

研究分野：パーソナリティ心理学

キーワード：ダークパーソナリティ　測定不変性　尺度作成　信頼性　妥当性　パーソナリティ特性　問題行動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ダークパーソナリティ特性 (代表的な特性として，自己愛〈自己陶酔的な特性〉，サイコパシー〈社会逸脱的な特性〉，マキャベリアニズム〈権謀術数的な特性〉，サディズム〈加虐快楽的な特性〉が挙げられる) は, 近年特に欧米圏において知見が蓄積されている概念であり (Figure 1), 様々な問題行動の予防・介入時に有用なパーソナリティ特性である (Lyon, 2019)。ダークパーソナリティ特性はいずれも他者に冷淡で自分の利益を最大化させようとする特性であり，非生産的職務行動 (O'Boyle et al., 2012) や，いじめ・攻撃行動 (例えば，Baughman et al., 2012) といった様々な問題行動との間に正の関連が示されている。しかし，これらの知見はほとんどが欧米圏の研究であり (Figure 2)，日本における問題行動にも適用できるかという点が重要な課題として残されている。とりわけ，欧米圏と東アジア圏との間では自己観が異なることや (代表的な研究知見として，Marcus & Kitayama, 1991)，東アジア圏の方がダークパーソナリティ特性の得点が低い (Jonason et al., 2017) ことを踏まえると，欧米圏におけるダークパーソナリティ特性と東アジア圏のダークパーソナリティ特性とでその文化的等価性を検討する必要があると考えられる。

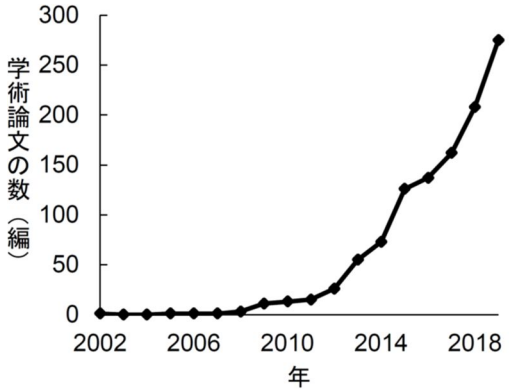

Figure 1. ダークパーソナリティ特性に関する学術論文数の変遷

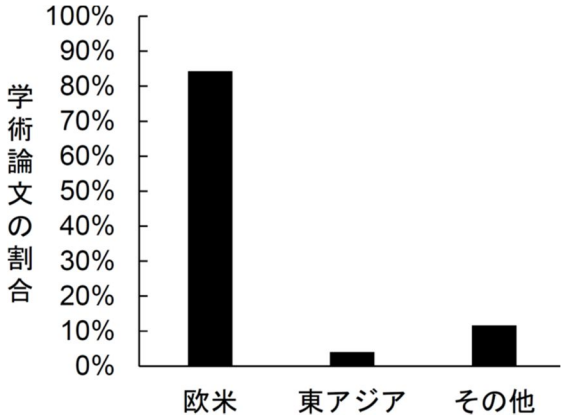

Figure 2. 各文化圏におけるダークパーソナリティ特性に関する学術論文数の割合

２．研究の目的

以上の問いへの学術的基盤を確立するために，本研究ではダークパーソナリティ特性の日米間の文化的等価性を検討することを目的とする。具体的には，第 1 に比較対象となる国際標準的なダークパーソナリティ特性の尺度の邦訳版を作成し，その信頼性と妥当性を検討する。第 2 に平均構造・多母集団同時分析を用いて，測定バイアスによる差と構成概念の差を統計的に分離して推定することで文化的等価性を検討し，その差を説明する文化的心理的特性を同定する。

３．研究の方法

本研究では，Short Dark Tetrad (SD4; Paulhus et al., in press) の尺度を邦訳し，その日本語版 SD4 (SD4-J) が先行研究と同様の因子構造，信頼性，妥当性を有するかどうかを検討した。方法としては，大学生 500 名 (男女 250 名ずつ)，Web 調査サンプル 1000 名 (男女 500 名ずつ，20 代から 60 代の各年代につき 200 名ずつ) を対象とした質問紙調査を行った。調査内容は SD4-J の他に，マキャベリアニズム尺度 (中村他, 2012)，自己愛尺度 (小西他,2006)，サイコパシー尺度 (杉浦・佐藤, 2005)，サディズム尺度 (下司・小塩, 2016) を用いた。分析手法として，Exploratory Structural Equation Modeling (ESEM; Asparouhov & Muthen, 2009；Figure 3) により 4 因子解の因子負荷量と適合度を評価した。併せて，調査属性(大学生，Web サンプル)，性別，年代間の測定不変性を検討した。また，α 係数，ω 係数を基に信頼性を評価するとともに，他の尺度との関連により併存的・弁別的妥当性の検討を行った。これに加え，オープンデータで公開されている SD4 のデータを用い，日米間の SD4 の測定不変性を検討した。具体的には，SD4 の各得点が日米間で異なるかどうかを t 検定によって検討した上で，平均構造・多母集団同時分析 (Figure 4) により因子平均と因子負荷量に等値制約を入れる・入れない，を考慮した複数のモデルを作成し，尤度比検定によってそれらを比較することで等価性を確認した。

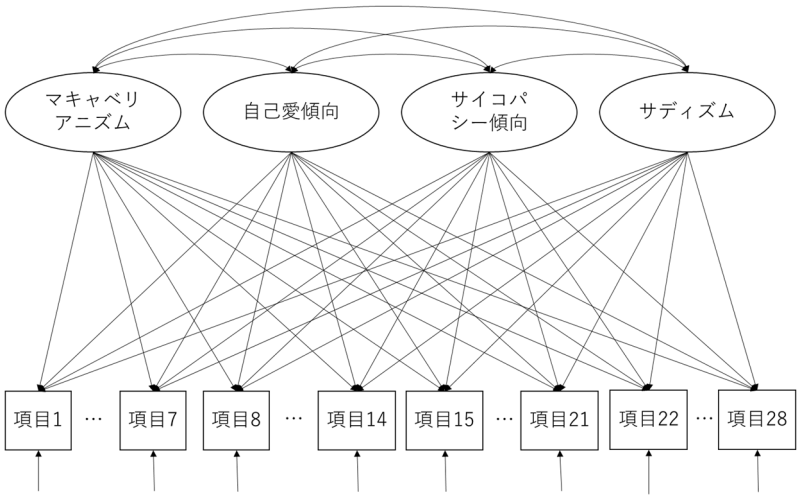

Figure 3. 探索的構造方程式モデリング（ESEM）の概念図

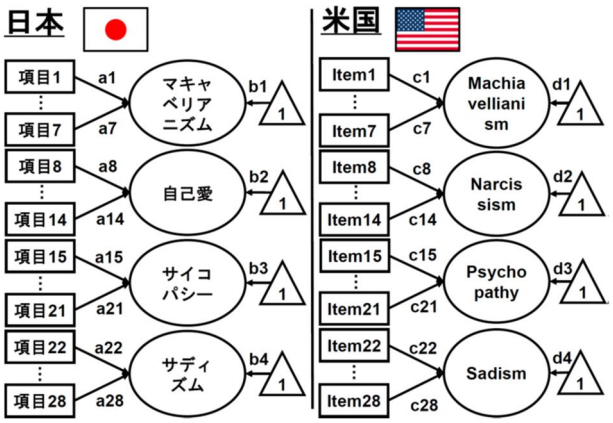

Figure 4. 日米間での平均構造・多母集団同時分析

４．研究成果

邦訳された SD4-J の因子構造について ESEM を実施した結果，原版と同様の 4 因子構造が示され，適合度も十分な値であった。次に，SD4-J の信頼性を α 係数および ω 係数を算出して評価した結果，それぞれ十分な信頼性を示した。また，妥当性の検討としてマキャベリアニズム尺度 (中村他, 2012)，自己愛尺度(小西他,2006)，サイコパシー尺度(杉浦・佐藤, 2005)，サディズム尺度(下司・小塩, 2016)との関連を検討した結果，それぞれ同じ概念間で高い正の相関が示され，SD4-J の一定の妥当性が確認された。また，日米間における SD4 の測定不変性を検討した結果，

日米で同様の概念を測定していることが示された。

以上の結果は，ダークパーソナリティ特性が文化的に等価な概念であることを示唆するものであり，海外の研究知見を我が国の問題行動の予防・介入に用いることができることが示唆された。加えて，本研究は我が国において 4 つのダークパーソナリティ特性を測定する尺度を開発した初めての研究であり，今後のダークパーソナリティ特性研究の端緒となりうる。今後はこの尺度用いてさらに文化的等価性を確認するとともに，予防・介入効果を検討する必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Yoshino Shinya、Shimotsukasa Tadahiro、Hashimoto Yasuhiro、Oshio Atsushi	４．巻 179
２．論文標題 The association between personality traits and hoarding behavior during the COVID-19 pandemic in Japan	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Personality and Individual Differences	６．最初と最後の頁 110927～110927
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.paid.2021.110927	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Dai Qi、Shimotsukasa Tadahiro、Oshio Atsushi	４．巻 8
２．論文標題 Short form of the five-factor narcissism inventory: A Japanese adaptation	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Cogent Psychology	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/23311908.2021.1935533	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hagiwara Chiaki、Shimotsukasa Tadahiro、Oshio Atsushi	４．巻 -
２．論文標題 Development of the Japanese version of the Revised Unmitigated Communion Scale	５．発行年 2022年
３．雑誌名 The Japanese journal of psychology	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.93.20216	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 ヴァージル・ジーグラー・ヒル、デヴィッド・K・マーカス、下司　忠大、阿部　晋吾、小塩　真司、川本　哲也、喜入　暁、田村　紋女、増井　啓太	４．発行年 2021年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 432
３．書名 パーソナリティのダークサイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関